寺園喜基先生『カール・バルト《教会教義学》の世界』を読んで

吉田真司（日本バプテスト相模中央キリスト教会牧師）

1. はじめに～謝辞

- 神学校を卒業して 27 年、三つの教会現場で教会形成（宣教と牧会）に従事。
- 週毎の説教と格闘しつつ、自身の聖書理解を問い問われ、解き明かす内容の論拠を積み上げ、壊され、またあらためて積み上げる、の繰り返し。聖書を「今という時代」の中でどのように語るか、またそのことばによってどう教会を建てていくか、という仕事。
- その中で体系的に神学し、説明（証し）できる力を得ること、その重要性を認識しつつ、しかし日々の務めに追われその作業が断片的であったこと認めざるをえない。
- 今機会にて、バルト《教会教義学》の全体（未完とのことだが）を俯瞰し、各論につき要点を教授いただけたこと、この上なく幸いなこと、感謝の一言。

2. 読む視点

- 今著を全体に渡って読むときに、私自身の大いなる関心事をバルト神学が構築された時代文脈においた。それは世界大戦期である。その危機的な時代状況の中で、教会がどのような存在であったのか、また世界や人間、そして罪がどう理解され、そこで説教がどう語られ、その説教が指し示す神（父・子・聖霊）がどのようなイメージであったのか。
- 神学とは常にその時代の中で研鑽され、新たなことば（現状への問いと原点回帰、そして真理を浮かび上がらせることば）が紡ぎ出されるものと信じる。

3. その危機的時代の中で

- 「ヒトラー政権下にあってボン大学の学長はドイツ式敬礼（中略）をもって全ての講義を始めるようにと通達したが、バルトはこれに抗して讃美歌を歌って始めた。」(20 頁)
- 「聖霊の働きによって人間は神を認識し、愛し、賛美するようにと自由にされ、神の子らとされる。」(29 頁)「聖霊を通して到達した神の啓示を受け入れた人間は、『神の子ら』とされ、そのような者として生きるようにと自由にされる。」(30 頁)———これは当時の人々の状況が真逆であったことの訴えではないか。
- 「イエス・キリストにおいて神は自由にこの世を愛された。そしてイエス・キリストの啓示において、神は永遠からしてご自身を、父、子、聖霊の永遠の三位一体の自由な交わりにおいて愛された。」(47 頁)———「神の愛」における自由な交わりと解放が著しく妨げられていた時代へのアンチテーゼと受け止める。
- 「神の忍耐とは、神が被造物・人間の存続を認め、弁護し、味方するということである。」(50 頁)———当時も、今も、神に忍耐を強いている。神が愛される被造物が存続に苦しんでいる。
- 「神は存在するすべてのものに対して、光が闇に対するように光り輝き給う。神は光の源泉である。そしてまた、神の光が照るところでは反射が起こる。すなわち、神の栄光は被造物による応答、賛美でもある。」(54 頁)———神の栄光に被造物が照らされる賛美の回復が求められる。
- 「或る在り方の国家、社会集団、階級が第二の神の民として存在するとかいうことはあり得ない。」(68 頁)「暴君への服従や奴隷の奉仕から区別される。」(69 頁)———ナチス（ヒトラー）への厳しい問題提起と受け止める。
- 「人間は信仰へと、悔い改めの行為へと召し出されているのである。」(73-74 頁)「われわれは朝ごとに日ごとにつねに新しく、生きるのである。」(74 頁)———「聖化」の必要。その時代、そして時代を貫いて人間に求められること。
- 「バルトは自由な愛の契約を根拠にした神の世界創造を語る。創造は神の『然り』であり、悪は存在論的不可能性である。」(80 頁)———創造（被造物の生命）に「否」が横行した悪しき時代に於ける明白な反論。———「創造論は、肯定的で建設的な精神を取り戻すべき戦後世界に対する、バルトのメッセージなのである。」(同)
- 「バルトは『人間の創造の目的は何か』について、『他の人間のために生きることである』と答える。それはイエスが『他人のために生きる人間』であることによる。」(85-86 頁)———他者のためにどう生きるか、他者のためにいます

人間、これが著しく排された時代と受け止める（今はどうか?）。――「バルトは第二次世界大戦という状況連関を通して『人間性は今日岐路に立っている』と注意を喚起する。そして、人間性の問題が全く新しく立てられなければならないこと、それは隣り人の権利、威厳、神聖さを問うという特別な視点で立てられねばならないこと、そして、それができるのはキリスト教的人間論であることを訴える。」（87 頁）――今はどうか?

- 「人間の本性が『我と汝の間の出会い』であり、『二人連れ』であり、『他人に対して開かれた心の自由から成り立っている』。」（88 頁）――非常に印象的かつ重要な原人間観（論）である。
- 「生が肯定され、意志されるということ、さらに利己主義も利他主義も排除されて、自分の生と共に他者の生が、また他者の生と共に自分の生が、肯定され意志されるということ」（136 頁）――この相互の「肯定」と「意志」が被造世界の渇望である。
- 「人間の高慢とは、『われわれは、神の如くであることを欲し、自ら神であることを欲する』ということである。（中略）バルトは世界の歴史を指摘してこう述べる。『ネロ、カリグラ、ナポレオン、ニーチェ、ムッソリーニ、ヒトラー等の、その時々に現れた世界史的な大カリカチュアのことを、考えてみるがよい。しかし、彼らは、人間の企ての不可能性、グロテスクさを、暴露したに過ぎない』。」（188 頁）「『人間の罪とは何か』という問いに対して、『それは高慢である』とバルトは答えた。」（190 頁）――あらためて「罪認識」の必要性、悔い改めの宣教の危急性を抱かせられる。そしてそれは、福音（イエス・キリストによる十字架と復活の恵み）の宣教の中で。
- 「教会が存在するのは自己目的ではない。そうではなく、一つの目標を持つ。それは、人間世界の聖化を表示することである。」（253 頁）「『教団の成長』。（中略）高みと深みに向かう垂直の成長であるときに正しく行われるのである。したがって、キリスト者が『聖ナルモノ』を受け、証しすることにおいて、またキリスト者が互いに他を励まし合い支え合うときに、『教団に内在する力』が働き、教団の成長が起こるのである。」（255 頁）――「高みと深みに向かう垂直の成長」ということばを得た。各個教会の教会形成（活動）もしかり、日本バプテスト連盟という協力伝道体もしかり、そのような志向が大切と受け止める。
- 「バルトは『誰がわたしの隣人なのか』という問いに関して、『自分が今認識していると思うものを越えて、新しく光を与えられ、新しく発見する覚悟を持ち、いつもその用意をしていなくてはならない』と主張する。キリスト教的隣人愛は、『今日の』兄弟姉妹に対することによって、『明日の』兄弟姉妹を『先取り』するのである。」（268 頁）――教会の隣人性への問いかけ、招きである。
- 「イエス・キリストは復活において目標・終末を先取りし給う。しかし、その目標は彼の外部においては、世や人間の状況においてはまだ達せられていない。そのような終結に関しては、彼は、御自身にとってまだ『将来』であり、あの出発点とこの目標の間では『途上』にいます。そして彼は途上においてわれわれに出会い、われわれは彼と共に勝利の確信をもって目標を目指して歩むのである。」（294-295 頁）「人間は、神の働きの対象であるだけではないし、傍観者ではない。神との和解を与えられた人間が、独立した能動的で自由な主体として、人間の方でも神の業に参与するように、神は場所と時間を備えられた。一人一人の人間が和解の証人であることを欲し、和解の出来事を認識し告白する集まりとして、教団・教会を欲し給うのである。」（295-296 頁）――「終末論」が与えられていることを感謝。今も昔も世界と人間の課題、問題は深刻であるが、しかしその中に神の恵みに自由に主体的に応答する者たち（教会）が建てられ、神の意志と共にそのわざに参与させていただけること、聖霊によって護り導かれ、そしてその将来を待ち望める希望を与えられていることに信仰を励まされる。

4. おわりに

以上、一読者（教会に仕える者）の一つの観点からの「感想」です。「〇〇論」のある部分を抜き出しての質問とはなってはいませんが、寺園先生におかれましては、上記の感想に対して誤認があればご指摘いただき、また当方の稚拙な感想に対しての応答をいただければ幸いです。また、今時代状況（戦争・迫害・強権支配止まない世界）の中、教会がいかに建つべきか、また日本バプテスト連盟の歩みに対するご期待についてもご付言いただけますと幸いです。これまでのお働きに心より感謝いたします。

以上